大正十四年三月二十日發行

驗震時報

第一號

第一卷

發刊の序

氣象臺及び測候所では永年來地震の驗測を行ひその成績を弘く調査及研究の資料に提供して居ります、本邦地震學の今日あるは勿論關谷、ユウイング、グレー、ミルン、大森諸先生及現存諸大家の卓絶せる研究の結果によることは申までも無いのでありますが、一方には日夜寢食を忘れて驗震の業に從事する測候所員諸君の世に顯はれて居ない努力も確かに幾分の貢献をして居らふと思ふのは必ずしも我々の手前味噌のみでは無いと考へます。

然るに先般關東大震以來地震研究の問題が甚だ八釜しくなりまして研究家の要求する資料が細微の點まで亘る樣になりましたに依つて驗震の方法も一層正確にする必要が起りました、夫で單に驗測に從事するものでも地震計の原理と構造は充分飲み込んで居らなければならず、地震に關する內外の研究は一と通りは窺がつて置かなければ滿足に職務が務まらなくなつて參りました、又測候所

相互の連絡を取つて驗測上共同の作業を要する點も非常に增加して參つて居ります、右の次第でありますから玆に本誌を創刊致しまして一面には是等相互の連絡機關と致し他面には既往內外の研究中驗測者として知らなくてはならないものを平易に記述して參考に供し、新規の研究は出來る丈け弘く抄錄して紹介することゝ致しました、又地震に關する內外の出來事も速報に努めるつもりであります、本誌が幸に驗測に從事せらるゝ諸君子の聊か侶伴ともなりますならば我々の幸福は是に過ぎませぬ。

大正十四年三月

中央氣象臺長　岡田武松

驗震時報　第一卷　第一號

目次

發刊の辭　岡田中央氣象臺長

報文

日本に於ける地震波動の傳播に就て　國富信一
近地地震に於ける初動の射出角　石川高見

蒐報

地震報告用語と略號　岡田武松
ふたご地震に就て　藤原咲平
地震氣象紙の複寫に就て　岡順次
地震記象紙用「ワニス」に就て　石川高見
地震報告記入に關して　佐藤秀雄
本年一月三十日の降灰　佐藤秀雄

新著

グーテンベルク「地震表面波の吸收と傳播速度」　岡田武松
地球內部の構造を論じた「マセルウエーン」氏の論文　國富信一

雜報

○微動計据付　○柿岡地磁氣觀測所の地震觀測　○北海道小樽港內に於ける火藥爆發
○震度の譯語